

はじめに

「武蔵野」、それは自然地理学的には乏水性の武蔵野台地をさすが、古代より人びとは武蔵野に対してさまざまな思いをはせてきた。現在もその名称が市や駅名をはじめ、団体・事業所やマンションなどに広く採用されていることからすると「武蔵野」には現代もなお独特のイメージがこめられていると推測される。

「武蔵野」は、とりわけ近代以降、肥大化する都市空間に対置する形で生活的風景としての意味が発見されることになった。明治30年代、国木田独歩が武蔵野の自然や風景に独自の価値を見だし、その景観的特徴を作品中で詳細に描いたことはよく知られている。

本ガイドは、フィールドワークの実践を通して「武蔵野」の地域的特徴を理解し・発見することを目標に、体験的地域学習の支援教材として作成したものである。ガイドの内容は、大きく学芸大キャンパスと周辺地域とにわかれている。前半の学芸大キャンパス・ガイドは、2010年11月に文化地理ゼミで開催した市民向けスタディーツアー「そうだったのか学芸大！風景で読み解くキャンパス・ツアー」で作成した資料がベースとなっている。一方、後半の学芸大周辺ガイドは、2008年度後期・大学院授業「地歴教育内容基礎研究法C」（担当・椿）での講義やフィールドワーク、受講した院生の課題報告・議論にもとづくものである。本授業では、学校教育や生涯教育における地域学習の意義と方法論を検討し、フィールドワークの基礎や技能の習得を目指した。「武蔵野」、とりわけ学芸大周辺地域を対象とし、地域社会の特徴や差異がいかなるプロセスで形成され変化してきたのかを文献資料や地図、統計データと現地観察にもとづき検討した。そのうえで、自然環境や風土、経済活動、生活文化、住民構成等が相互に関連し形成される「景観」を素材に、景観の特徴とその解釈方法を提示することとした。具体的には、地域や場所の個性をとらえる上で有効な景観を受講生が「景観写真」として抽出し解説を加え、椿が編集を行った。

本書が「身近な地域再発見」の契機となり、多くの方々に景観を読み解く楽しさを味わっていただけたら誠に幸いである。

2012年3月

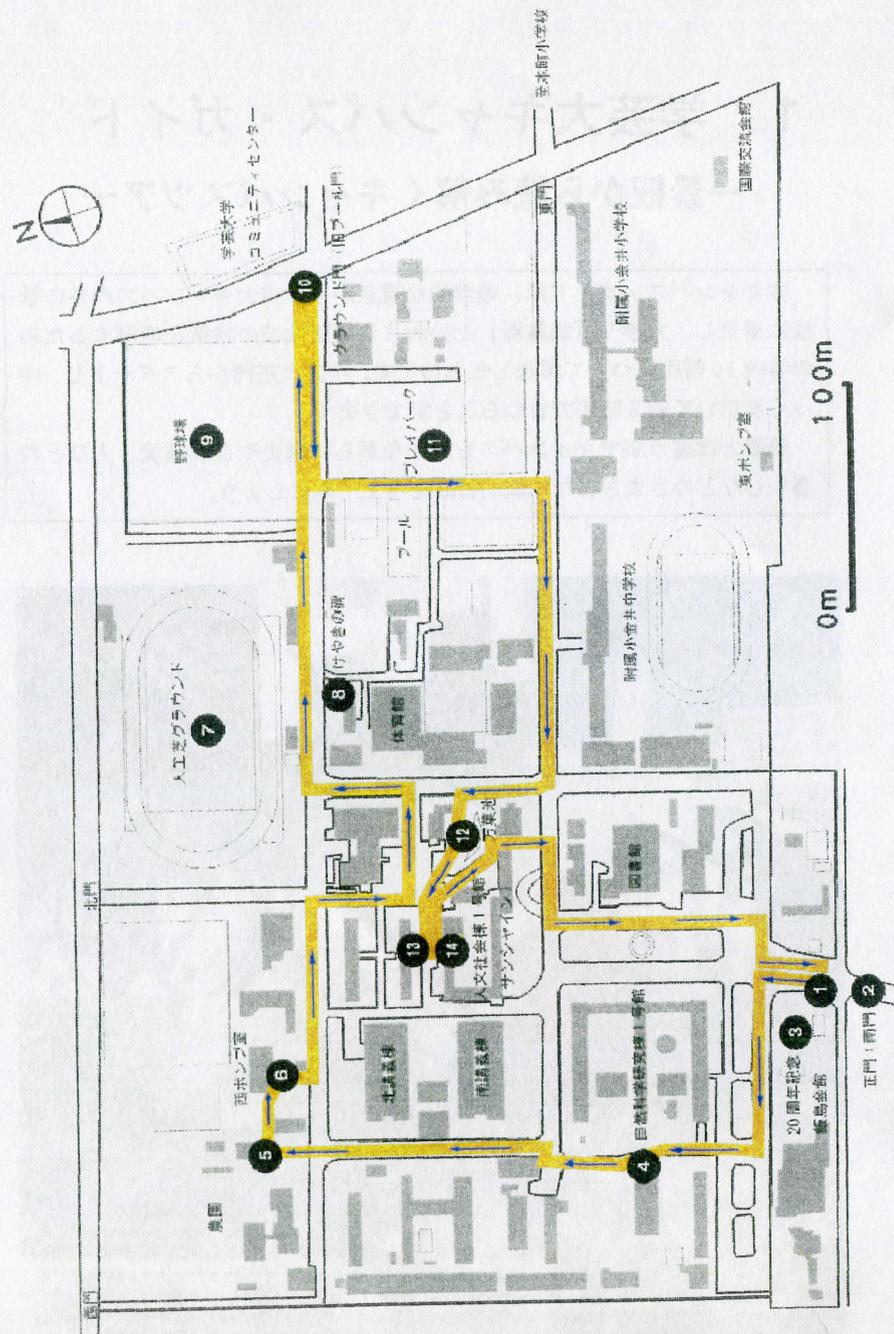
東京学芸大学人文科学講座地理学分野
教授 椿 真智子

1. 学芸大キャンパス・ガイド —景観から読み解くキャンパスツアー—

本キャンパス・ガイドは、地理的な視点から学芸大キャンパス内外の景観に着目し、大学や「武蔵野」といわれる周辺地域の特徴を理解するための学内14箇所について解説したものです。学芸大正門からスタートし、ゆっくり歩いて約2時間でまわることができます。

普段とは違う眼でキャンパスを眺めながら、歴史や自然環境、人びとの暮らしなどのさまざまな地域の特徴を考えてみましょう。





キャンパスツアー順路図

① 東京学芸大と小金井

東京学芸大学は第二次世界大戦前の師範学校(東京第一・二・三師範学校、東京青年師範学校)を母体として1949(昭和24)年に設置されました。1945(昭和20)年4月、前身の一つである東京第二師範学校が空襲により施設を焼失し、1946年、池袋から小金井への移転を決定しました。移転先は陸軍技術研究所のあった場所です。移転当時の第二師範学校敷地は、南北は現在とほぼ変わらず、東側は現在の本町小学校の西側道路まで(現在より300mほど東)、西は附属中学校や大学体育館西側道路までの約5万坪の土地でした。現在も本町小学校東側の道路脇に「陸軍」と刻まれた石柱があります。

1947(昭和22)年、現在の東門近くで出火があり、失火のあった敷地がアメリカ軍に没収される恐れがありましたが、東門以東のみ(全体の約半分)没収という形に落ち着きました。現在の敷地の西半分は陸軍第三・八技術研究所の土地で、研究所が閉鎖されたあとは一部農家や工場として利用されていました。その立ち退き問題が1958(昭和33)年に解決し現在の東京学芸大学敷地となりました。

※「陸軍技術研究所」：第1～10研究所と多摩研究所の11か所のうち6か所が小金井・小平に立地。兵器材料や通信兵器などの研究開発が行われていた。

② 正門前の桜並木



(2010年4月3日 椿撮影)

陸軍技術研究所には5つの門があり、当時の表門が現在の正門にあたります。1941(昭和16)年の陸軍技術研究所開設時に桜が植えられ、1949(昭和24)年新制大学となった時には桜並木が存在していました。桜はサトザクラ、オオシマザクラ、ソメイヨシノなどの種が混在しており、その後も10本程度新たに植

えられました。現在の歩道は十数年前に整備されて歩行者専用となり、交通安全に配慮しています。

③ 20周年記念飯島会館・飯島和日本庭園

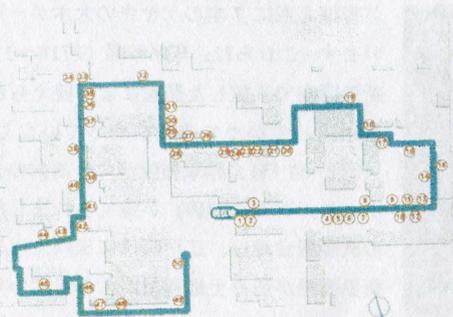


(2010年10月25日 矢鳥撮影)

1969(昭和44)年は新制大学として出発して20年目にあたり、その記念として「20周年記念会館」建設が計画されました。同窓会関係者により建設資金が集められましたが目標額を下回り、一時、計画を断念せざるを得ない状況となりました。それを耳にされた本学前身校の一つである東京第二師範学校を卒業され当時山崎製パン株式会社社長であった飯島藤十郎氏は残る必要経費を全額

寄付され、無事着工することができました。飯島藤十郎氏の遺徳を偲び、現在「20周年記念飯島会館」と命名されています。飯島会館前の日本庭園は、同じく本学前身校の一つである竹早女子師範出身である飯島藤十郎夫人・飯島和さんからの寄付によるものです。庭園の設計・工事は小金井市在住の造園家が行いました。飯島和夫人への深い感謝をこめて「飯島和日本庭園」と命名し、四季折々の樹木や草花を毎年楽しませていただいています。

④ グリーンアドベンチャー



正門(社団法人青少年交友協会HPより)

のほか新宿御苑・代々木公園・日比谷公園・北の丸公園、神代植物園、井の頭恩賜公園、品川区民公園、上野公園、昭和記念公園等にも設置されています。

グリーンアドベンチャーとは、1973(昭和48)年に森田勇造氏が考案した野外文化活動で、単に植物の名前を覚えるだけでなく、五感を使って植物を観察し、植物と生活文化との関わりを考えようという施設です。学芸大には2005(平成17)年に設置され、50種類の樹木・植物を楽しく観察できます。グリーンアドベンチャーは全国に60箇所以上あり、都内の大学では2箇所

⑤ 環境教育実践施設

キャンパス北西に位置する環境教育実践施設は1.8haの敷地を持ち、環境教育や理科室授業・研究等に使用されるほか、地域住民や学外団体の方々にも活用されています。野外教育園として水田や畑、ビニールハウス、池などが整備され、芝生広場は憩いの場として親しまれています。農園には様々な植物や野菜・果樹が栽培され、現在は江戸野菜の栽培も行われています。



写真1 農園内に広がる水田



写真2 農園内のミカンの樹



写真3 農園の北側にある竹林



写真4 農園内の果樹園の看板

(写真1~4は2010年11月11日 鈴木撮影)

⑥ 学芸大学と地下水

学芸大学の水はすべて地下水でまかなわれています。地下水は、地下の水道管を通して、国際交流会館以外のすべての建物に供給されています。東京都の水道管もありますが非常専用で普段は使われません。地下水を汲んでいる場所は学内で2ヶ所（西井戸・東井戸）です。東井戸ができたのは1969（昭和44）年ですが、西井戸は1971（昭和46）年に改修工事をしたことがわかるのみで詳細は不明です。井戸の深さは西井戸が150m、東井戸が200mです。井戸の90mくらいの深さにポンプを入れ、地上に水を汲み上げています。90mの深さから水を汲み上げている理由は、学芸大が武蔵野台地上にあり地下水が深いからです。

なお地下水は月に約9,500 m³、年間114,000 m³も汲みあげています。もし都水道水を使っていたら月に約400万円、年間4800万円ものお金がかかります。地下水を使うことで水道代の節約にもなっているわけです。



(2010年11月4日 村上撮影)

⑦ 総合グラウンド

学芸大のグラウンドは2004（平成16）年3月に土から人工芝へ変わりました。

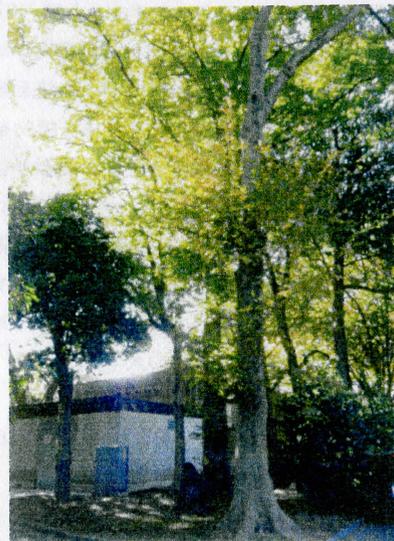


当時、本学は「開かれた大学」、FC東京は「地域に根ざしたスポーツクラブ」、小金井市は「健康で豊かな地域社会の創造」を目指し、「地域への社会貢献」を実現するための場所としても整備されました。「学芸大クラブ」というリーグチームの参加した日本で初めての産・学・官連携によるスポーツクラブも設立され、カー教室、ウォーキング・

完成当時のグラウンド（瀧井敏郎『産・学・官連携による学芸大クラブ』2006より引用）

ジョギング教室等が開かれ、本学の教職員、サッカー・陸上競技部等の学生たちもお手伝いをしています。人工芝化以前のグラウンドは砂が舞いやすく、近隣住民から「洗濯物を外に干せない」等の苦情が寄せられていました。人工芝化はこうした問題を解決することにもある程度貢献したと考えられます。

⑧ ケヤキの碑



体育棟北東に7本のケヤキの大木が一行に並んでいます。これらは、享保年間（1716～1735年）に新田開発で入植した農家により植えられたもので、列に沿ってかつて道路が走っていました。1982（昭和57年）、陸軍施設ができる前の土地所有者により「ケヤキの碑」が建てられました。乏水性の武蔵野台地は、江戸時代に玉川上水を利用した新田開発が進み土地利用が大きく変わりました。開拓農家は宅地をケヤキなどの木々で囲み、武蔵野特有の季節風を防ぐ防風林にしたり、薪炭や建築材として利用したり、葉を堆肥にしたりと様々な利用しました。ケヤキは日常生活に欠くべからざるものでした。



「ケヤキの碑」(2010年11月12日 関川撮影)

⑨ 野球グラウンド



(2010年11月5日 小嶋撮影)

普段は野球・ソフトボール等の授業と課外活動に使用されています。現在のグラウンドは1969(昭和44)年に開設され、それ以前はこの場所に学生寮や合宿所などがありました。2007(平成19)年より産学官連携事業である「ジャイアンツ・アカデミ

ー」が開始されました。「ジャイアンツ・アカデミー」とは、ジャイアンツのスタッフが子どもたちに野球指導をする事業で、都内10ヶ所で行われています。多摩地区でも実施したいというジャイアンツの意向があり、学芸大で先行していた「学芸大クラブ」に倣って本学でアカデミーが開催されることになりました。



(ジャイアンツ・アカデミーHPより引用)

⑩ プール門 (現・グランド門)

バス停や交差点の名称として残る「プール門」は、1964(昭和39)年まで使用されていたプールが現在の「ローソン」の場所にあったことがその由来です。このプールは戦前の陸軍施設で、舟艇実験用として、10名の武装兵を乗せて秒速5mで水深50cmの浅瀬を渡河可能な「突撃艇」や、陸上運搬も可能な「装甲艇」などの渡河実験用として利用されたといわれています。



学芸大が現在地に移った後も学生の水泳実習や附属小中学校の授業などに使われていました。現在、プール跡地にはコンビニエンスストアと地域に開かれた施設「東京学芸大学コミュニティセンター」があります。

(<http://gakugeimania.at.infoseek.co.jp/index.html>より引用)

⑪ プレイパーク

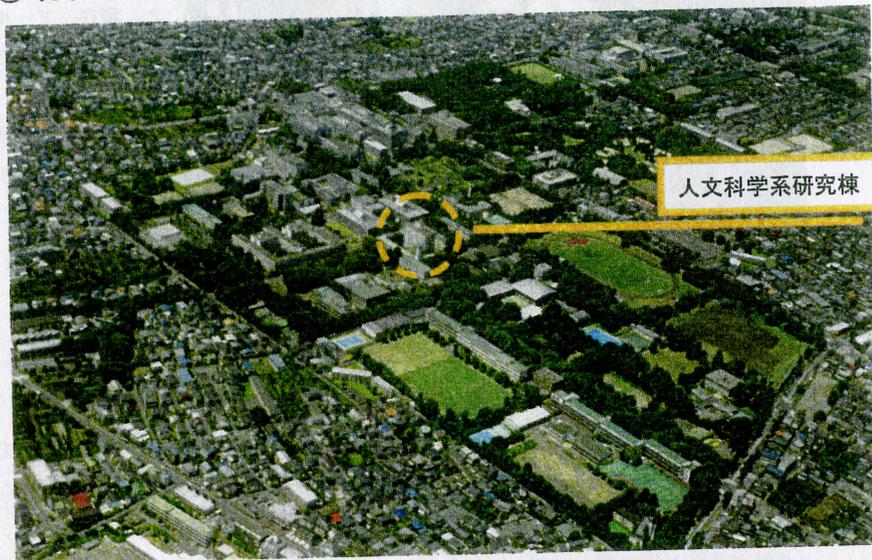
プレイパークとは、自然の残る空き地等を利用し、「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーにした遊び場のことです。1943(昭和18)年、デンマークの造園家・ソーレンセン教授が世界最初のプレイパークを作りました。子供たちがきれいに整備された公園よりも、ガラクタの転がる空き地で喜んで遊んでいるという長年の観察に基づきプレイパークを考案しました。1970(昭和50)年頃日本にも伝えられ、世田谷区の「経堂こども天国」を初めとして現在では全国200以上の団体がプレイパークを運営しています。

学芸大では、毎週水曜14~17時にNPO「小金井子ども遊パーク」の下で活動が行われています。大学の授業や研究として、自然の中で自由に活動する子どもたちの発育発達や遊びと学びを融合した効果的な学習プログラムの開発なども行われています。

⑫ 万葉池

緑が豊かなキャンパスの中でもひととき落ち着ける空間、それが「万葉池」です。生協に近く学生たちにとっても身近な場所です。時計台のある建物が図書館であった1960（昭和36）年頃、図書館2階に学長室があり、学長室からの眺めが美しいものになるよう築造されたそうです。万葉学者太田善麿氏の協力を得て、万葉集にちなんだ植物が植えられています。自然の池ではないので脇に水道の蛇口がありますが、今では大賀ハスもみられます。

⑬ 総合教育科学系・人文科学系研究棟1号館

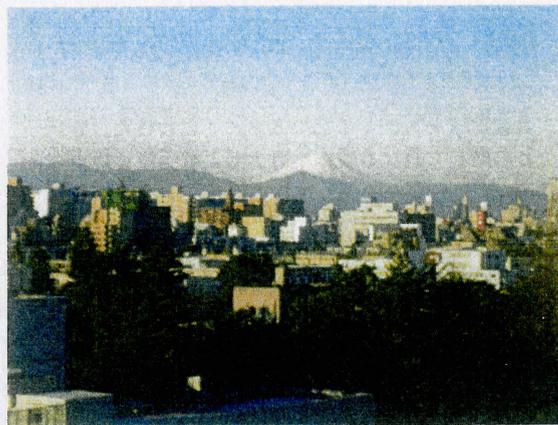


(2010年撮影 東京学芸大学広報課資料)

総合教育科学系・人文科学系研究棟1号館は、1979（昭和54）年3月に着工され、翌1980年3月に5億4,860万円の費用をかけて完成しました。9階建てで、完成時、大学周辺では最も高い建物だったことから、当時都内一の高さを誇っていた池袋の「サンシャイン60」をまねて通称「サンシャイン」と呼ばれるようになりました。もともと8階建てにする予定だったそうで、隣の建物との通路の位置がずれ、天井も他の建物より低いです。

⑭ 総合教育科学系・人文科学系研究棟1号館の屋上

※普段は施錠されていますが、授業等で事務の許可をえて、屋上から周囲を観察することができます。



(2009年1月24日 永山撮影)

晴れて空気のすんでいる日は、東は新宿副都心、スカイツリー、筑波山、西は秩父・奥多摩の山々、富士山、南は多摩丘陵、北は埼玉西武ドーム、日光男体山まで見ることができます。景観を観察することで、大学周辺地域の土地利用や都市化に伴う地域変化の特徴を読みとることができます。

学芸大キャンパス・ガイド作成：東京学芸大学「文化地理ゼミ」

担当教員：椿真智子（人文科学講座地理学分野）

院生（2010年度）：社会科教育専攻地理学コース2年石井貴裕・永山淳一・佐藤京子
社会科教育専攻地理学コース1年関川直樹

学部生（2010年度）：F類文化財科学4年堀井将吾

A類社会4年大谷達也・木内悠斗・鈴木喬裕・矢島幸子

B類社会4年小嶋辰彦、F類環境教育4年須山祥平

A類社会3年小川裕人・清沢創一・島田雄仁・蛸井星峰・村上 格

ご協力いただいた機関：財団法人コカ・コーラ教育・環境財団、東京学芸大学財務施設部広報連携課広報企画係・地域連携係、東京学芸大学財務施設部施設課、東京学芸大学附属図書館、辟雍会事務局